

# 適正飼育された犬がもたらす子どもたちへの効果に関する研究

## The study of the effect of animal intervention for class of elementary student using dogs which had proper socialization and training

ヒトと動物の関係に関する教育研究センター 伊澤都

Miyako Izawa The Educational Research Center for Anthrozoology

キーワード：生活科、小学生、動物介在教育、教育支援犬、テキスト分析

Keywords : Living Environment Studies, elementary school student, Animal-assisted education, educational supporting dog, text analysis

### 1. 緒論

動物介在教育においては、2001年にIAHAIOのリオ大会にて動物介在教育ガイドラインが宣言された。適正飼育された動物を用い、管理下において導入すべきであると宣言された。しかし、当時の日本では動物介在教育に関する文献や知識が少なく、ガイドラインが宣言されたものの、小学校での実施は非常に困難な状況であった。あれから、10年が立ち、日本でもいろいろな団体が各自実施してきたことから少しずつ受け入れられる環境が増えてきた。しかし、いまだアレルギーの問題や教育への効果についての懸念が叫ばれ、実施したいと考えている教員がいるにもかかわらず、様々な問題・課題があるため実施できないことがある。これらの問題や課題に対処し、適正飼育された犬を用いて、小学校の授業に参加することで、児童にとってどのような効果があるかを検証し、結果を出すことが、今後の動物介在教育の普及と、動物の適正飼養の普及・啓発につながると考える。

### 2. 目的

小学校の教科に犬を介した教育プログラムを導入し、犬とのかかわりが子どもたちにもたら

す効果について、保護者へのアンケート調査と、児童の授業実施後の感想文等から総合的に効果を検証する。

適正飼育された犬を用いて、教科に応じた犬を介在させた授業のあり方を提唱する。

### 3. 方法

相模原市にある2つの小学校、光が丘小学校と田名北小学校の低学年の教員、児童、保護者の協力により調査を実施した。

保護者を対象とした動物に対する感情・態度に関するアンケート調査、犬を介在させた授業の実施、児童の授業後の感想文のテキスト分析、絵画の分析を行った。アンケートの自由記述および児童の感想文は、テキスト分析システム Mining Assistant を使用した。犬を介在させた授業は、生活科、図工、体育、国語、算数であった。参加した犬は、当センターの教育支援犬(小学校の授業に参加する犬)基準をクリアした犬を用いた。これは、動物介在教育・療法学会のセラピーアニマル評価者養成講座委員会が定めた介在動物適性評価基準をもとに、小学校の授業に必要な素養、態度、行動を判断するために当センター独自に設けた基準である。対象とした児童及び保護者は各294名で、授業後のア

ンケートについては、転出した児童、アンケート未提出もいたため、人数は異なる。

#### 4. 結果

動物に対する態度について、児童と保護者ともに、動物の会話をする事が多く、触りたいが躊躇する割合が犬、猫で高い。動物や飼い主によって態度を変えるという回答でも同様に犬と猫で多い回答になった。

児童の犬と猫に対するアレルギーに関する調査では、犬に対するアレルギー反応が見られる割合は 5.9%、猫に対しては 12.9%で犬の方が少なかった。アレルギーがあるとの申請がある場合、犬を介在させた授業の実施において、アレルギーの可能性のある児童は犬に触らないようにするという対処をとり、児童にアレルギー反応は見られなかった。

犬を介在させた授業実施後に行ったアンケートからは、児童の変化について全体の約 60%で何らかの変化があったと回答した。特に月 1 回ペースで実施した田名北小学校では、約 70%もの保護者が変化ありと回答した。変化の内容は、授業のことを家族によく話す、犬に対する恐怖心の克服、犬の飼育願望、興味の増大などがあげられ、授業のことはあまり話さなかった児童が優しい顔をしながら楽しそうに話をするようになった。

国語への犬の介入からは、教師の印象として、楽しく授業を受けることができ、漢字の宿題忘れが減少したと報告があった。

算数への犬の介入は、成績に結び付く結果ではなかったものの、授業を楽しく受けることができ、関心を引きながら学習を進めることができたとして教師は報告した。

体育への犬の介入は、自然と犬の動きに着目して励ましなどができた。教科への犬の導入により、授業が楽しかったという感想が多くあり、犬に対して自分が学習を教えてあげたいという声や、犬に対する思いやりの内容、観察し

たことへの感想など学習とは違った発見が見られた。

生活科への導入で得られた感想からは、全体として犬の名前が多くあげられた。1年生でもボール投げ、ジャンプなどといった授業の内容を反映した文章を書くことができていた。また、図工の時間に絵を書く授業からは、授業で使ったマットやえさあげ、ゴムとび、フラフープ、ボール投げといった活動した内容について描く児童が多かった。

#### 5. 考察

犬を介在させた授業の実施後、動物に対する態度について、走り寄って触る児童の数が減り、相手の様子によって態度を変えるということや、身につけている子どもが多いということがうかがえる。これは犬を介在させた授業の中で犬との約束を伝えていたことが児童の態度に反映されていると示唆される。アレルギーに関する結果では、犬よりも猫の方がアレルギー反応が出る児童の割合が高いことが分かった。犬を介在させた授業にてアレルギーのある児童も他の児童と同様に参加していたが、特にアレルギー症状がでることもなく実施できた。犬に触らない、終わったら手を洗うことを守ることで対応することができた。犬を介在させた授業実施後の保護者への調査では、児童に何らかしらの変化が見られたという回答は 60%あったことから、その有効性が期待される。特に月に 1 回ペースで実施した田名北小学校では約 70%が変化したと答えた。実施回数が多いと、その変化が明確になることがいえる。このような授業への希望については高い割合で希望するという結果がでた。保護者の回答から見てきたことは、家族に学校であったことをよく話すようになったことや、恐怖心の克服、興味が増大したなど、子どもだけでなく保護者にとっても良い印象を与えたと考える。個々の変化については、今後の課題としていく。

2つの小学校で犬を介在させた授業の実施において、その関わり方によって得られる効果の違いが見えてきた。動物を用いた訪問授業を行うに当たっては、限られた時間で子どもが動物に対してどのような理解や学習をしたかが重要になる。先行研究では、30分間の授業でも子どもに正しい犬との接し方を伝えられる<sup>1)</sup>、1年生を対象にした90分の授業でも、子どもたちは達成感や犬に対する不安軽減を文章で表現できる<sup>2)</sup>というものと、複数回行うからこそ理解を定着させ、拒否的だった子どもにも変化がみられる<sup>3)</sup>という複数回行う意義を唱えた報告がある。これらそれぞれ子どもに良い効果をもたらしているが、学校側が求める体制や受け入れに合わせた授業づくりが必要となると考える。国語、算数、体育への犬の介入による成果としては、ほとんどの児童が楽しかった、うれしかったという感想が上がり、授業への動機付けとして良い効果があったと考える。国語においては、この時間をきっかけにして、漢字の宿題忘れが減り、全般的に文字が丁寧になったという教師からの成果も注目に価する。犬が参加したことで、楽しい経験となり、漢字への苦手意識が減少したと考えられる。興味を持って取り組むということに犬はその一助となりうる。動物介在教育や動物介在療法において、動物を動機付けとして介在させることがあるが、教科に導入する場合には、介在させる内容、役割を明確にすることが重要になると考える。授業の教科のねらいだけでなく、犬に対する思いやりが芽生えることが今回実践の中で生まれた付加価値であると考えられる。

生活科での取り組みにおいて、感想文のわんちゃんや犬という表現は少なく、固有名詞が特に入っていたことは、的場らの研究<sup>3)</sup>と同様に、子どもが個体識別をただけでなく、その犬との相互作用をもったことと考える。犬の特徴を知ることが目的にした授業を行った回では、犬の能力を知ってもらうため、運動機能を中心に

一緒に体験した。そのため、感想文にはボールで遊んだことなど活動した内容が多く書かれていた。これは、伊澤ら<sup>4)</sup>の報告と同様の結果となり、1年生でも実施した内容を文章で表現することが可能であることがわかった。「犬に触れてみよう」での体の観察とふれあいにおいて、説明したことや心臓の音を聞いたことが多く書かれており、心臓という言葉とあたたかいという言葉について多く書かれていた。授業の中で伝えたかった、「体のぬくもりを感じる」ということは達成できたと考える。人と動物の相互作用において「触る」という行動は子どもにとって最も大きな影響を与える<sup>5)</sup>。

図工の絵からは、ふれあいをした時のマット（ピンクと青）を描いた児童が多数いた。心理学的な解釈では、その時の場面を忠実に再現しているという。また興味深いのは、リードを書いた児童の場合、そのリードは画面の端に書かれており、ほかの人、つまりハンドラーがリードを持っているように書かれている。活動をしている様子が詳細に再現されており、そこに描かれている子どもの顔はほとんど笑っている様子であった。複数の子どもが書かれていても、マットには乗らず周りで待っている様子であった。絵画からも、ルールを守って犬との活動をしている様子が伺えた。今回は絵画が授業の評価として使用できるか予備調査した。絵画の解釈については、もっとデータを収集し、専門家を交えての解釈を進めていきたいと考えている。動物介在教育の評価手法の一つになり得ると考える。

今回は、全体としてどのような変化があったかという観点で考察したが、学校教育に必要なのは個人の変化であり、この調査分析を残り1年をかけて進めていく予定である。

## 6. 結論

適正飼育された犬を参加させた授業の実施は、授業を受けた児童の学習意欲、学習成果に

良い影響をもたらすことがわかった。また、生活科の実施で、ほかの教科、図工、国語、道徳に結びつけることが可能である。教科として、算数、国語、体育への犬の導入は、学習意欲の向上だけでなく、教科のねらいの達成の一助と思いやりの気持ちなど、情緒面での獲得に影響をもたらす。さらに児童への影響は保護者にも伝わり、このような授業への犬の介入は有効であるといえる。ただし、教員と犬を扱うスタッフとの連携が不可欠で、まずは教員が犬についての理解を深めることが児童への充実した授業の展開につながる。

## 7. 謝辞

本研究にご協力いただいた相模原市光が丘小学校教員の皆様、児童及び保護者の皆様、相模原市田名北小学校教員の皆様、児童及び保護者の皆様に心から感謝の意を表します。また、麻布大学介在動物学研究室ヒトと動物の関係に関する教育研究センターの犬と一緒に教育支援ボランティアの皆様、犬たちに心より感謝の意を表します。

## 8. 参考文献

- 1) Chapman, S., Cornwall, J., Righetti, J. & Sung, L. 2000 Preventing dog bites in children: randomised controlled trial of an educational intervention. *British Medical Journal*;320(7248):1512-1513.
- 2) Matoba, M & Kakinuma, M. 2009 .Changes in children's negative attitudes towards dogs expressed in essays during a Human animal bond (HAB) education program-negative comments decreased as the Children became acquainted with the dogs. *日本動物介在教育・療法学会雑誌*, 1:25-28.
- 3) 的場美芳子、柿沼美紀. 2009. 初等教育における犬を用いた動物愛護教育プログラム実践: 作文分析による教育効果の測定の試み. *日本獣医生命科学大学研究報告*, 58:86-93.
- 4) 伊澤都、萩原都奈、的場美芳子、柿沼美紀. 2011. 小学1年生を対象とした動物介在教育～生活科で犬とのふれあいから学ぶ～ *日本動物介在教育・療法学会雑誌*, 投稿中.
- 5) Marie, M., Fabienne, D., Marion, W. & Jean, L. A. 2010. Dogs, Cats and Horses: Their Different Representations in the Minds of Typical and Clinical Populations of Children. *Anthrozoös*;23:383-395.